

個人史から考える日中近現代関係史：沖縄現地調査報告を中心に

The Report of Okinawa Research as a Part of
Reevaluation of Japan-China Relationship in the Modern Era
from the Viewpoint of Individual History

田 宮 昌 子

本研究は、戦死した親族（筆者の父方の伯父）の遺品を日中戦争従軍時のものを中心に整理し、史料として保存・公開することを目指す。目下、遺品として21世紀初頭の今日まで残った、20世紀初頭から中葉までの記録を留める品々を、個人の私有物から社会に共有される史料とするために裏づけ作業を加えている。関連する文献に当たることは勿論であるが、現場に実際に足を運んで文献では得られない実感を得ること、今まさに世を去りつつある体験者の肉声を聞くことも合わせて行ってきた。今年度は故人終焉の地である沖縄を沖縄戦慰霊の日の6月23日を挟んで訪ねた。小稿では主にこの沖縄訪問・調査について報告する。

キーワード：山西、沖縄、日中近現代関係史、個人、史料、現場、実感

目 次

はじめに

一．中国山西から沖縄への転戦と玉碎

二．沖縄現地調査報告

三．体験者に聞く

むすびに

はじめに

本研究は、戦死した親族（筆者の父方の伯父に当たる田宮圭川^{けいせん}）の遺品を日中戦争従軍時のものを中心に整理し、史料として保存・公開することを目指す。近現代日中関係史、あるいは昭和史などの史料として活用されることを願うものである。また、異なる時代が一つの家の二世（伯父と姪）にもたらした中国へのアプローチの違いについて、大日本帝国期に生きた一青年の教養や認識のあり方について、中国認識や対中姿勢を中心に、日本国期を生きてきた次世代の視点から考察し

ようとする。

目下、遺品として21世紀初頭の今日まで残った、20世紀初頭から中葉までの記録を留める品々を、個人の私有物から社会に共有される史料とするために裏づけ作業を加えている。防衛省に残る旧日本軍の記録や、北京の国家図書館に残る日本占領下で発行された日本語新聞の調査など、当時の文献に当たることは勿論であるが、同じ部隊の元日本兵を訪ねたり、中国山西省を、駐屯地である孟県周辺を中心に二度訪問、現場に実際に足を運んで文献では得られない実感を得ること、今まさに世を去りつつある体験者の肉声を聞くことも合わせて行って来た。今年度は故人終焉の地である沖縄を故人と同じ旅団の歩兵であった近藤一さんの慰霊にお供する形で、沖縄戦慰霊の日の6月23日を挟んで訪ねた。小稿では主にこの沖縄訪問・調査について報告する。

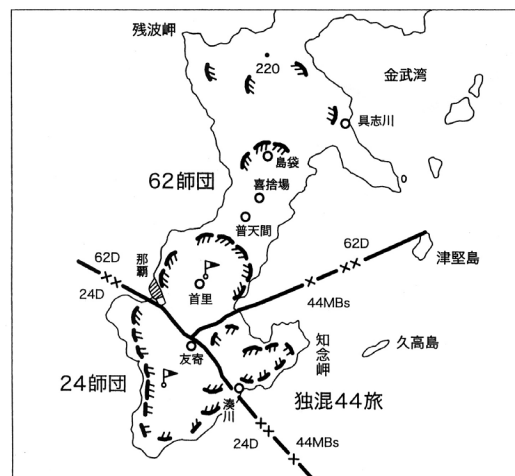
一. 中国山西から沖縄への転戦と玉砕

1944年、南方戦線の悪化を受けて、大本営は支那派遣軍から2個師団を抽出することを決定する。河南作戦を終えていた第六十二師団は7月河南省開封に終結、沖縄防衛のために編成された第三十二軍の戦闘序列に編入される。独立歩兵第十四大隊の衛生兵であった大西昇氏の回顧録¹によれば、開封終結時には色々なデマが飛び交ったが、結局は“消耗品”として南方戦線に行くという結論になり、写真などの遺留品や遺書の整理・発送に連日忙しくしたという²。圭川の遺品も自作のアルバムが19年の河南作戦直前で途切れるため、この時期に内地の実家宛に発送されたのではないと思われる。師団は古年兵や弱兵を残置し、陣容を再編する。大陸残留組はほぼ生還した一方で、沖縄転出組は玉砕。生死の分かれ目となった。

8月5日、列車で上海に南下、17日に上海吳淞港を起航。兵士たちは目的地を知らぬまま、19日沖縄に到着した³。石部隊と呼ばれた第六十二師団の配置は本島中頭郡で、第十四大隊の宿営地は仲西であった。本島中部西海岸側にある。それからは米軍の攻撃に備えて陣地構築に励むが、米軍のフィリピン上陸を受け、12月に在沖縄日本軍の最有力師団であった第九師団が台湾へ抽出され、それに伴い沖縄の防衛態勢が再編成される（図1）と、45年2月に第十四大隊は本島中部東海岸側の浦添村・西原村・宜野湾村・中城村に移動、再び陣地構築に励む。

圭川の沖縄時期の所属は、第三十二軍・第六十二師団・歩兵第六十三旅団・独立歩兵

図1 沖縄戦部隊配置図 1945年2月以降



第十四大隊（石三五九五）機関銃中隊。圭川は中隊長であった。

前述したように、生家に残る遺品は沖縄に向けて中国大陸を離れる際に発送されたもので、沖縄到着後は写真や手書きメモなど本人によって残されたものは一切ない。圭川の三弟で筆者の父である圭舟によれば、沖縄へ着いてからもしばしば生家に手紙は来ていたとのことであるが、米軍上陸までの約8ヶ月のころ。「内地に来たからいい」「バナナと芋ばかりで下痢している」などの内容を圭舟は覚えている。また「千里」という地名が手紙にあったと記憶しているが、「千原」の誤りかも知れない。

4月1日、ついに米軍上陸を迎える。米軍は本島中部西海岸の湾から上陸し、東海岸まで一気に進んだ後、南下を始めるので、第十四大隊は第十三大隊と共に戦闘開始直後から最前線に立つことになった（図2）。その後、日本軍の防衛線は激しい抵抗で大きな犠牲を出しながら、じりじりと南下し、5月10日頃には第一軍司令部のある首里に至る。この首里攻防戦では第十四大隊は既に戦力の消耗により予備部隊であった。米軍の包囲が迫る中、既に戦力の9割を失っていた（大西氏）第六十二師団は首里死守⁴、つまり首里での玉砕を主張していたが、第三十二軍は首里放棄、南部撤退を22日に決定する。本土決戦までの時間を少しでも稼ぐためのいわゆる“捨石”作戦である。この頃、本島南部には戦火に追われた避難民が十数万居たといわれ、そこへ敗走する日本軍とそれを追う米軍がなだれ込んだことにより、沖縄戦の悲劇は深まった。首里玉砕を主張した第六十二師団は他部隊の撤退を援護する役回りとなり、第十四大隊がようやく南部へ撤退するのは28日頃のことである。第十四大隊は途中米軍の追撃を迎え撃ちながら、6月6、7日頃には米須（図3）に集結したようだ。他部隊からの編入者も加えて部隊を再編、この時点で第十四大隊は隊長以下520名。戦闘はまだ続き、17日には主力部隊が82高地、一部が摩文仁に転進している。圭川が中隊長を務めていた機関銃中隊は82高地を拠点とした。19日朝には米軍の攻撃が及び、他の中隊と共に「田宮中隊モ二十日夕刻迄殆ソト戦死シタルヲ以テ同夜全員最後ノ斬込ヲ決行ス⁵」。また「(20日夕刻には)大隊モ亦各隊四離滅裂トナリ、残存者僅カ⁶トナレリ。同夜半大隊ハ師団命令ニ依リ残存者ヲ以テ二、三名ノ組ヲ編成逐次全員敵陣ニ斬込ヲ決行ス」という記述もある⁷。第十四大隊は82高地一帯で“組織的戦闘”を終了、20日には玉砕したことになる。

図2 沖縄戦要図（中部戦線）

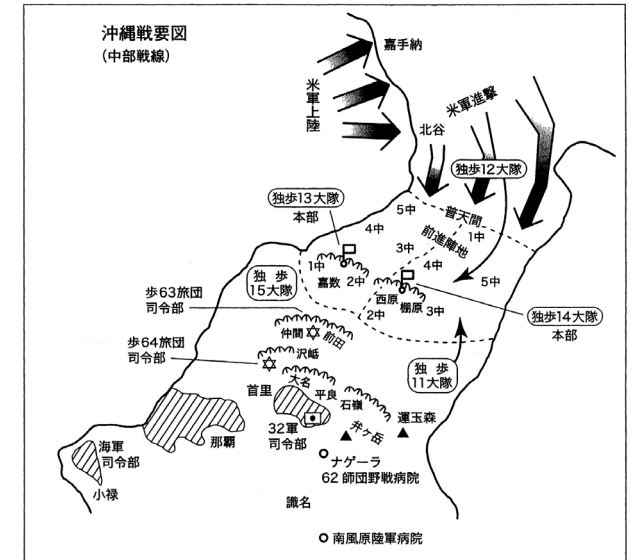


図3 南部戦線 1945年6月15日前後



圭川の最後であるが、出身地である三重県庁の記録⁸では、昭和20年6月26日「沖縄本島米須方面に於いて戦死」の14文字のみ。それ以上の情報はなく、遺骨も遺品も帰っていないので、この死亡日が何を根拠としたものか不明である。この日はちょうど故人の30歳の誕生日にあたるので、単なるこじつけかもしれない。日本軍の記録ですら「各隊四離滅裂」として20日で終わっている中、この戦死記録が何を根拠としているのか不明であるが、もしこれが事実であれば、20日の斬込の後も生存し、沖縄戦全体の“組織的戦闘”終了3日後に戦死したことになる。82高地は後述するように特定できなかったが、米須と摩文仁の丘を結ぶ線の間であり、この2地点が徒歩でも半時間と掛

からない位に近接している。圭川は20日から26日にかけて、この一帯で最後を迎えたというのはほぼ確実のようだ。

一方、圭川の後について、戦友会や親族の間では手榴弾による自決との話が伝わっていた。話者によって少しずつ細部が異なるが、曰く、第十四大隊のある兵士が沖縄戦末期に小さいガマで上官たちと一緒にいたところ、圭川を含む上官3人（或いは4人）から「ガマが狭いからお前は出ている」と言われてガマを離れ、そのうち米軍の捕虜になった、ガマに残った上官たちは手榴弾で自決した（或いは「したのだらう」）。ガマを出てしばらくすると中で手榴弾が爆発する音がしたのだと話す人も居る。そうして、この話を伝えた元部下は一人生還したのが心苦しくて、なかなか隊長の親元に伝えに来られなかったと泣いておられたとか、上官たちは最後を伝えるために部下を逃がしたのだらうなどと続く。これらの話は伝聞するうちに話者の記憶違いや憶測を交えて、少しずつ変形しているものと思われるが、出所は一人の方である。三重県松阪市在住であった松浦桑^{まっ}松さん（2008年5月死去）。中国山西省から沖縄まで圭川の中隊で転戦した中では、中隊唯一の生還者という⁹。確かに、1994年の沖縄での50回忌法要の際に、隊長が自決した壕だとして、松浦氏の先導で平和祈念公園内の三重の塔の裏手に回り、地面の凹凸が激しい深い茂みの中を転んだり足を引掻いたりしながら、数分から10分程度歩いて小さなガマに案内された。足を踏み入れるとすぐに行き止まりで3人ほど座るのがやっとの小ささだった。圭川の二人の弟である圭道と圭舟

が郷里から持参した菓子や水を供え、僧侶である圭舟が読経をしようとしたが、嗚咽のためなかなか始められなかった。

しかし、松浦氏に2006年聞き取りしたところ、「中隊長は21日の『擲弾筒を打ち込め』と言ったところまでは知っているが、それからどうなったかは分らない。自分は21日洞窟を出てからは他の兵士がどうなったかは分らない。こちらに戻ってから、中隊長が亡くなったのを聞いて、お寺に墓参りに行った」との回答であった。その頃には氏との対話には心もとないところがあったため、氏がお元気な頃に周囲が聞いたはずの話との齟齬をどう考えていいのか分からず当惑した。

かなり後になって、50回忌法要のための沖縄訪問について筆者自身がまとめたアルバムに松浦氏から聞き取った内容が書き込まれているのを発見した。自分では全く失念していた。それによると、松浦氏が最後に圭川を見たのが6月18日、松浦氏に案内されたガマにおいて。松浦氏はそのガマを出て、その後米軍捕虜となり復員したため、その後のことは分らないが、ガマに残った上官4人は手榴弾で自決したのでは、というのが松浦氏の推測、とある。1994年時点の記録と2006年時点の松浦氏の記憶とをつき合わせると、日付や上官の人数に違いはあるが、中隊長は玉砕を目にした時期に複数の上官とあのガマにいた、松浦氏は中隊長の自決は見えていないという点は確かなようだ。

前述の大西氏の回顧録を同じ第十四大隊所属で沖縄転出時に除隊となって無事帰国した山本泉氏（三重県熊野市・故人）が所蔵していたものには田宮隊の頁に隊の最後についての書き込みがあると今回沖縄行を共にした加藤氏から聞き、その複写を見せてもらったところ、手書で「20. 6. 26 摩文仁 田宮隊長、佐藤少尉、藤田⁰曹長、三重の塔のうらの壕にて自決の由」と書かれている。やはり松浦氏からの伝聞であろう¹¹。自決の推測が出るのは、3人が戦死していること、最後の時点では既に戦闘が終わっていること、部隊が玉砕した後に将校たちの手榴弾自決が多かったこと、などからだろう。

戦死の知らせは、終戦後しばらくたった頃、まず帰還兵からの伝聞として家族に伝わったという。「戦死公報」が来たのは、それより後だが、圭舟はいつ頃かはっきり覚えていない。入隊した久居の連隊に遺骨を取りに来るよう通知があり、圭川の次弟である圭道と檀家総代が二人で出かけ、圭道が白い布で木箱を首に下げて帰ってきた。中には、名前と階級を書いた紙切れが入っただけで、遺骨はおろか、遺品も入っていなかった、この箱は包んであった布がボロボロになった頃に墓に入れたという。墓碑には正面に「祖珉圭川」、裏面に「昭和三十八年八月建立 故陸軍大尉 田宮圭川 昭和二十年六月二十六日沖縄本島 米須方面ニテ戦死 行年三十一才」と刻まれている。墓を立てるまでに18年が経過している。遺骨も無い中でなかなか断念しきれなかったものであろうか。

二. 沖縄現地調査報告

2008年6月、筆者は6月23日の慰霊の日に合わせて、沖縄を訪問した。圭川が第十四大隊である

のに対し、同じ旅団の第十三大隊の歩兵であった近藤一さんの慰霊にお供する形で、近藤氏の戦争体験に関する書籍¹²の編集者の一人である加藤修弘氏も同行した。今回の沖縄行きはもともと近藤氏が二十数年来続けてこられた慰霊の旅を高齢のために今年を最後とするというお話を聞いて、その慰霊の旅に同行しようということから始まった。今まさに社会から去りつつある戦争体験者と共に戦場の跡に身を置きながら、直接体験を聞くと共に慰霊の姿を傍らで見届けたいという思いからである。現地では第十三大隊の慰霊を行う近藤ご夫妻の慰霊行脚に同行する傍ら、加藤氏と第十四大隊の転戦地の調査を行った。

1. 沖縄本島中部 なかがみ 中頭郡

活動第一日めの6月22日は主に沖縄本島中部中頭郡で第十三大隊と第十四大隊の転戦地を回った。

かかず 嘉数高地

まず最初に嘉数に向う。4月1日の米軍上陸時に近藤氏が所属した第十三大隊の守備陣地があった地点である。初期戦闘の最前線の左翼を担い、4月3日の戦闘開始から約20日間、激戦が繰り返された。嘉数高地攻防戦の最中の第十三大隊本部壕の様子が記録に残されている。

嘉数の村は建物は全くなく、生物一ついない焼け野が原と化している。…嘉数の洞窟に入ろうとしたところ、一人の歩哨が入口の岩の上に立って立哨している。その前に兵隊の遺骸が五、六人伏したままになっている。歩哨に声をかける、『立哨中異状ありません』弱弱しい声だ。副官は『なぜ入口の兵隊の死骸を片付けないか』。辺りは死臭がひどい。よく見れば三人の死体は腐敗して骨と皮だけ、『ハッ、戦友は立哨中にやられました、次々とやられて、もう片付ける兵隊が居りません』。副官は『そうか』と言ったきり部隊長に従って入る。壕の中は負傷兵で一杯だ。どの兵隊も呆然としている。一点を見つめたまま、まばたきもしない者、ビリビリに裂けた真っ黒い上衣に腕をつった者、投げ出した半分の足に真っ赤に染まった布切れを当てている者、誰も言葉も出ない。…嘉数部落への絨毯爆撃のすさまじさ、入口の歩哨兵の死骸の山、そして壕内の戦死者、負傷兵の状況、第十三大隊長の憔悴きった顔、この嘉数は地獄の坩堝と化している¹³。

いま一帯は嘉数高台公園として整備されている。高台の頂上へと続く階段を近藤さんは夫婦二人でどんどん上って行き、途中で進行方向左手に階段から外れて、木立の中に入って行く。二十数年“通いなれた”道なのだろう、近藤さんは迷わずまっすぐ大隊本部壕跡に辿り着く。今は木製の柵がはめられていて、中には入れなくなっている（写真1）。入り口を入ると、左右両方向に通路があり、入り口の反対側である北側に監視哨があったという。



写真1 第十三大隊本部壕入口

第十三大隊本部壕から階段に戻り、その階段を上りきると、左手に「京都の塔」慰霊碑がある（写真2）。慰霊碑碑文によると、この付近は敗戦直後には戦火のためにすっかり焦土と化し、樹木もなく、トーチカの残骸が残るのみという有様であったそうだ。いま目の前にある亜熱帯の鬱蒼とした樹林を焼き払った戦火の激しさに思いを馳せる。塔の手前に韓民族出身沖縄戦戦没者慰霊碑「青丘之塔」がある。近藤さんは第六十二師団の慰霊碑である京都の塔と、その右にある地元住民の慰霊碑「嘉数の塔」の順で手を合わせた。「嘉数の塔」では手を合わせた後、修学旅行生が手向けたらしい千羽鶴に触れていた。

京都の塔の北側には第十三大隊本部監視哨が今も姿を留めている。珊瑚礁岩の塊と見えるが、地面に接した辺りに長方形の口が開いている。ここで嘉数攻防戦で近藤さんが負傷する4月9日未明までの話を聞く。

頂上にある展望台に上り、周囲の地勢や本島中部戦線の各地点との位置関係を確認しながら、近藤氏の当時の記憶を聞く。近藤氏の後ろに広がる湾（北谷～嘉手納の海岸線）から米軍が上陸した（写真3）。あまりの近さに驚く。4月1日の上陸時には米軍の艦艇で海面が見えないくらい埋め尽くされ、圧倒されたという。東側に広がる高地は第十四大隊が守備にあたった千原高地がある辺りだ。どれも目と鼻の先である。18万の大軍を以てすれば一日で進軍できそうな距離を、貧弱な武器で20日間も一進一退の攻防を繰り返した日本軍の戦いぶりの頑強さに思わず感情移入しそうになる。近藤氏が持つ、最前線で戦い続けたことへの強い矜持がようやく納得できた気がした。沖縄で見ると日本軍も哀れさを誘う。しかし、貧弱な武器を駆使して、米軍の物量に立ち向かう精神力と戦闘の勘が、ひとつは華北での実戦経験から来ていること、敵軍に「出血を強要する」ことを目的とした尋常でない戦いぶりが、米軍に本土上陸作戦の犠牲の想定を大きくさせ、それが各地への空襲や広島長崎への原爆投下に繋がったのでは思うと複雑である。労組系の平和学習の団体と一緒にいる。生き証人にお尻を向けて、ガイドの話に耳を傾ける奇妙な光景となった。

近藤氏は前年8月の沖縄到着後は9月末から大隊本部経理室配属となり、戦闘に参加していなかったが、中隊戦力減少を受けて、4月8日深夜に中隊復帰、翌4月9日未明に負傷、野戦病院に送られる。負傷した地点を探すが、激戦の最中でもあり、上方に米軍戦車が見えていた、本部壕の



写真2 京都の塔と嘉数の塔



写真3 嘉数高台上にて



写真4 前田高地にて

下方に居て「大隊長が生け捕りになる」と慌てて突進したなど状況しか覚えていない。どうやら今は住宅などが建っている辺りらしく、判然としなかった。高台を降りていく中腹辺りに近藤さんと同じ三重県桑名市出身の兵士の両親が息子の戦死の地に立てた碑があった。

前田高地

浦添ようどれ（琉球国中山王陵）がある小高い丘。嘉数高地の陣地を撤退して、南下した後の次の防衛ラインとなったのが前田・仲間高地である（図2）。当時はここに第63旅団司令部があった。嘉数とは目と鼻の先の距離であるが、近藤氏は司令部に出入りした経験はない。ここでも地勢や周辺の拠点との位置関係を確認しながら、近藤氏の当時の話を聞く（写真4）。前田高地の北側は傾斜のきつい崖で敵と対峙するには好都合だったろう。本島中部では一際高く、周囲の見晴らしがきく。右手前方に丘陵が広がる。今は琉球大学の敷地となっている。前田から見てその手前、大学敷地の西側に千原高地（142高地）が位置する。

この後は近藤氏は南部に下がって慰霊、加藤氏と田宮は第十四大隊の中部戦線での転戦地点をめぐる。

161.8高地

米軍上陸後の本島中部戦線の最前線右翼を担った第十四大隊の前進陣地。第一中隊が配属されていた。161.8高地とは旧日本軍の作戦上の呼称であり、現在の地図上に記載は無い。当時の「戦況



写真5 161.8高地陣地掲示板



写真6 161.8高地陣地か

図」と現在の道路地図を突き合わせ、地勢や高度を手がかりに探す。地点は絞り込めたが、周囲の私有地や道路の関係から、思うように接近できず苦勞する。ここと狙い定めて丘に入っていく。進行方向右手に海が見えたから斜面を南から北に登ったのだろう。途中までは整備された散策路がある。「キシマコノ嶽 161.8高地陣地」と記した表示板があった（写真5）。それによると、本部壕や塹壕の跡があるはずである。草の茂みに分け入り、本部壕の入り口や監視哨跡、塹壕跡を探す。樹木や下草が茂って確認が難しい。山を出て、陣地跡の地形を確認できるポイントを探して

タクシーで周辺をうろろする。写真6がV字型の谷に相当すると思われる。

西原の塔

1993年に本土復帰20周年記念事業として整備されたもの。西原町地元住民戦没者刻銘碑、字別の戦争被災者柱数の碑、第八十九連隊慰霊碑などがある中に、石独立歩兵第十一大隊の慰霊碑もある（写真7）。碑文に、この大隊は6月18日に南部島尻与座仲座108高地にて玉砕したが、駐屯地があった西原町に慰霊碑を建てたとある。

津覇小学校

津覇国民学校跡地（写真8）。現在は津覇小学校となっている。校舎は鉄筋コンクリートの頑丈そうな造りであるが、戦時中も当時は珍しいコンクリート校舎であった。1945年2月、第九師団台湾抽出後の再編成で第十四大隊の駐屯地となった¹⁴。我々が訪ねた日は、津覇小学校は投票所となっていて、会場となっていた体育館の中に入って選挙監視員らしい高齢男性と話が出来た。石部隊がこの地に駐屯していたことはよく知っており、当時自宅に20名ほどの兵士が宿泊していたと話してくれた。一軒の民家に20名という人数に驚いたが、当時の兵士たちは雑魚寝だから使用していたのは2部屋程度だったという。

千原高地（142高地）

第十四大隊機関銃中隊（中隊長、田宮圭川）の陣地。前述の大西氏の回顧録は「機関銃中隊（田宮隊）屍の山」の見出しで、機関銃中隊のこの戦闘の様子を載せている。それによると、田宮隊は千原を陣地に第一第四第五中隊の戦闘を掩護、重火器所有のため米軍の激しい砲弾攻撃を受けた。中隊精鋭の殆どは千原の陣地で戦死し、4月24日には、重機関銃一銃のみ、隊長以下残兵20数名であったという¹⁵。

高度の最も高い箇所にへばりつく様にして少し登ってみる。周囲の地形が良く分かる（写真9）。頂上からであれば、周囲の見晴らしがきくことだろう。しかし、142高地はすぐ脇を通る沖縄



写真7 石独立歩兵第十一大隊慰霊碑



写真8 津覇国民学校跡地



写真9 千原高地



写真10 第14大隊第3中隊陣地跡を探して（棚原）

自動車道により削り取られていて、往時の地形とはだいぶ異なるようだ¹⁶。

棚原

第14大隊第3中隊陣地跡を探す。複雑な地形と路地に加え、棚原地区は一部が琉球大学のキャンパスになっているため、思うように目的に接近できず、うろうろ探し回る。一度誤って西隣の徳佐田集落で特定し始めるが、地元の人に確かめて再出発。西原敬愛園（徳佐田と棚原との中間にある高台の上）付近から棚原地区を眺めると、ひときわ小高い丘が見える（写真10）が、それと確定できぬまま断念。

幸地

第十四大隊本部壕跡を探す。嘉数の第十三大隊本部壕は場所も簡単に特定でき、確認できたのは入り口だけではあるが、割合に安定した状態であった。十四大隊本部の壕も簡単に探せるかと思いきや、何人かの地元住民に尋ねるも皆知らない。仕方なく幸地で一番高い丘へと向かう。樹木が生い茂っており、何の手がかりも無しに茂みに分け入るのは断念。少し離れた地点から集落の中に突出する高台を撮影（写真11）。日本軍拠点はどの地点も共通して、辺りを見渡せる高度と戦車が登り難い急な斜面を持った高台に設置されている。この地点は確定できるものはないが、同じ特徴を持っている。

仲西

仲西国民学校跡地を探す。昭和19年8月20日に第十四大隊が那覇に上陸して最初の駐屯地が西海岸の仲西で、ここで20年2月の移動まで、ひたすら陣地構築に励む。この時期に宿舎としていた国民学校跡を探して、始めは現在の仲西小学校を目指す。付近の商店（山城商店）に入って道を尋ねたところ、店主の妻がたまたま仲西国民学校に通っていたということで、彼女の話から国民学校は戦災で消失し、現在の仲西小学校は戦後現在の位置に移転して再建されたことが判明。元の地点はそこから数百メートル離れた国道沿いの地で、現在はガソリンスタンドなどが立ち並び、全く往



写真11 第14大隊本部壕跡を探して（幸地）



写真12 体験談を聞く（仲西国民学校跡地付近）

岸の仲西で、ここで20年2月の移動まで、ひたすら陣地構築に励む。この時期に宿舎としていた国民学校跡を探して、始めは現在の仲西小学校を目指す。付近の商店（山城商店）に入って道を尋ねたところ、店主の妻がたまたま仲西国民学校に通っていたということで、彼女の話から国民学校は戦災で消失し、現在の仲西小学校は戦後現在の位置に移転して再建されたことが判明。元の地点はそこから数百メートル離れた国道沿いの地で、現在はガソリンスタンドなどが立ち並び、全く往

時の面影はない。店主の奥さんから当時の様子を聞くことが出来た（写真12）。

石部隊は国民学校に駐屯して、建物の一部を使用していた。生徒たちはそのまま通学を続けた。時には先生の指示で訳も分からず土を運んだりした。「戦争」とは何のことか分からなかった。ある日、兵隊さん（シマガミ上等兵）が校舎の窓から呼ぶので行ってみると、竹筒に入った米をくれた。当時は米は貴重品だったから拝むようにして礼を言った。家に持って帰ると、親はどうしたのかと訝しがった。事情を話すと、食べ物（たしか天ぷら）をこしらえてお礼に持って行けと言う。それからお互いに物のやりとりがあって、お付き合いをした。子供心に「神さまのような人」と思った。家族は10.10空襲からしばらくして、国頭の方へ疎開した。戦後こちらに戻ってみると辺りは戦災で一変していた。石部隊は他へ行ったと聞いたが、シマガミさんは生きていたのだろうか？生活に追われるうちは考えなかったが、この頃どうしているかと思って探してみるが、分からない。

彼女からはシマガミさんについて何か分かったら知らせて欲しいと熱心に依頼されたが、小学生当時の記憶のため、石部隊で大阪出身という他は苗字の音しか知らなかった。このように、当時を知る島民は日本軍のことを「石部隊」「山部隊」「珠部隊」などと通称号で呼ぶ。軍資料に現れる通称号の使われ方がようやく分かった。上述の津覇小学校での例も含め、子供でも自分たちが住む地区に駐屯する軍隊が何部隊なのかはよく分かっていたようだ。

2. 沖縄本島南部 島尻郡

二日め6月23日は、沖縄戦戦没者の慰霊の日である。筆者も線香や水、供え物を用意して近藤夫妻、加藤氏と共に摩文仁に向かった。朝9時に出発するが、摩文仁に向かう道路はかなりの渋滞で車はのろのろと進む。歩道から溢れて車道を歩いている人々も多い。平和行進と銘打って、摩文仁まで当時住民が戦火を逃れようと避難した道を辿るように徒歩で慰霊祭会場を目指しているようだ。三々五々歩く個人参加らしい人たちがあれば、揃いのゼッケンを着けて、横断幕や幟を掲げて行進する団体も多い。労組関連もあれば遺族会の行進もあり、プラカードの内容を見ると政治的立場の左右を問わず参加するようだ。近藤氏によれば毎年このような行進の光景が見られるという。

米須ゆたか泉

米須地区に入ると摩文仁へ向かう道路から進行方向左手で車を止め、小道に徒歩で入る。その先にこんもりとした茂みが見える。その茂みの中に第十二大隊の壕があった。近藤氏は当時この壕で傷病兵の看護に当たっていた女子看護隊の生存者から、奥の安全な場所に大隊長が陣取り、女子看護隊には「弾除けに入り口に立っている」などといったという証言を聞いている。近藤氏の話では以前は何もなかったそうだが、近年壕の湧き水を汲み

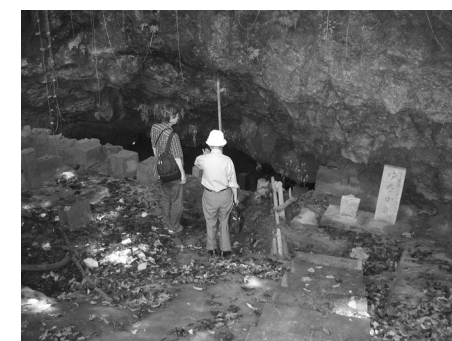


写真13 米須ゆたか泉



写真14 第十三大隊慰霊碑にて



写真15 三重の塔裏のガマ

上げる設備と思われるものが建設され、入り口にはコンクリートの建造物が見える。壕の入り口までの斜面には石段があり、それを降り切った壕の入口の脇に「字米須…(以下判読不能) ゆたか泉」の石碑が立てられている(写真13)。斜面を降りて少し中に入るが、傾斜が急なので足元がぬかるんで不安定なため、まだまだ先へと続いている暗闇の中を覗き込んで引き返した。ここは内部に水が湧いている関係からか、ひときわ蚊が多く、軽装だった近藤夫人はあちこち刺されて閉口していた。わずか10分もいたかどうかのことであるから、この内部に潜むことの困難が察せられた。

平和祈念公園

平和祈念公園(糸満市摩文仁)到着。広い園内を徒歩で移動。まず、園内右翼に広がる「国立沖縄戦没者墓苑」へと向かう。緑地や歩道が美しく整備された中に都道府県ごとの霊域が延々と続く。炎天下の中を歩いて、「沖縄三重之塔霊域」に辿り着く。

まず近藤氏の所属部隊であった第十三大隊の慰霊碑。近藤氏が供えた立派な花輪が慰霊碑の左右に据えられていて、意表を突かれる。「三重県桑名市 近藤一」と何の肩書きも無いのが、潔い印象である。近藤氏はまず直立不動の姿勢をとった後、背中をまっすぐに保ったまま腰から折り曲げる形で深々と頭を下げた。恐らく軍隊式の所作なのだろう。その後、両手を合わせ、仏教式に拝んだ(写真14)。次に第十三大隊慰霊碑の奥にある第六十二師団慰霊碑の前へ。この奥は6月22日に第六十二師団長藤岡武雄中将と歩兵第六十三旅団長中島徳太郎中将が自決した地点である。近藤氏は自分たちの大隊が所属した師団の慰霊碑の前に大隊慰霊碑を建てられたことを非常に誇りに嬉しく思っているようである。師団慰霊碑の前というようなこんないい場所に立てているのは十三大隊だけだと微笑んだ。ここにも近藤氏の花輪が左右にでんと供えられている。

ここまでで近藤氏はかなり疲れたらしく(炎天下の中でかなり歩いた上に前日に続いて二度目であった)、三重の塔前の亭に腰掛けて休む。田宮はその間に伯父圭川が自決したと10年前に教えられたガマを探してみる。前述した(327頁)元部下による手書メモに「20. 6. 26 摩文仁 田宮隊長、佐藤少尉、藤田曹長、三重の塔のうらの壕にて自決の由」と残る。確かに、戦後50周年の年、50回忌のために訪れた時には、隊長が自決した壕だとして、元部下であった前述の松浦さんに先導されて塔の裏手に回り、深い茂みと凹凸のある場所を数分ほど歩いて小さなガマに案内された¹⁷。足を踏み入るとすぐに行き止まりで数人が座るのがやっと思われる小ささだった(写真15)。

そこへもう一度行ってみようと思うが、塔の裏手には石垣が整備され、それを乗り越えると、3メートルほどの堀のような深みが続いている。その先の茂みは筆者の背丈ほどもあり、当時どこをどう辿ったのか見当もつかず、断念する。

沖縄全戦没者追悼式

もと来た道を徒歩で戻り、追悼式会場へ。テントの張られた会場には手荷物検査をして入っている。多くの一般参加者は会場を遠巻きにするように周辺の斜面に寛いだ様子で思い思いに陣取り、まるで運動会のような平和な眺めである(写真16)。米兵の姿もあるのは意外であったが、思えばこの追悼式は“全戦没者”を対象とするものであった。11時53分に「沖縄全戦没者追悼式」(主催：沖縄県・沖縄県議会)が始まり、12時ちょうどに黙祷。15分ほどすると、近藤氏が「次の慰霊会場に早めに行きたい」ということで、予定を早めて移動する。来賓の式辞が続く中で少々後ろ髪を引かれながらであったが、後で近藤氏がこの時点で既に疲労困憊していたことが分かる。炎天下の徒歩がきつかったのではと反省する。

瑞泉隊慰霊祭

米須地区。「ずるせんの塔」と刻まれた慰霊碑の前で毎年この日に慰霊祭が行われている。ここにも近藤氏からの花輪が備えられており、沖縄県知事や那覇市長、県議会議長と並ぶ唯一の個人名の花輪に老兵の気概や誇りを感じた。石部隊の看護に当たったのは、主に梯梧学徒隊と瑞泉学徒隊の女学生達だった。近藤氏は戦後その生存者の方たちとの交流を続けている。ここで3人の男性が近藤さんに声を掛け、しばらく談笑して記念撮影する。後で聞くと、近藤氏の体験や証言を紹介した本の読者で、近藤さんと分かって、声を掛けて来たそうだ。本を出してから沖縄では時折あることだという。近藤氏はここでも祭壇に敬礼と合掌をして追悼し、参会者とひとしきり挨拶を交わすと、慰霊祭自体には参列せず、来賓の沖縄県知事や那覇市長が到着する前に会場を辞した(写真17)。どうやらこれが近藤氏の慰霊のスタイルらしい。

魂魄の塔

慰霊祭会場を辞した後は同じ米須地区にある魂魄の塔を訪れた。戦後地元住民が摩文仁の丘を埋めた大量の白骨を集めて吊った塔である。小さく素朴な塔であるが、多くの人が慰霊に訪れ、宣



写真16 沖縄全戦没者追悼式会場



写真17 瑞泉隊慰霊祭

伝車やライブパフォーマンスなどで賑やかであった。個人名が刻まれた平和祈念公園の平和の碑とはまた異なり、沖縄戦の無名の犠牲者を弔う場所として多くの人が訪れるようである。近藤氏は前日既に訪れており、疲労のため車内に留まる。

なお、一日目にお世話になったタクシー運転手大見謝おおみじやさんがこんな思い出を話してくれた。敗戦後3、4年経った頃だろうか、小学校の遠足（筆者注：社会見学か）で摩文仁に出かけた。一面が人骨で白く見えた。身に着けていたはずの衣服は無くなっていて、頭蓋骨の目の空洞から植物が伸びていた。あの光景は今も忘れられない、と。こうして沖縄では生活の場が戦場となり、戦のあともそこで暮らし続けることで受け継がれていく記憶があるのだろう。

識名野戦病院壕跡

午後1時半ごろ南部を去り、一旦那覇に向けて北上する。道路は渋滞し、のろのろとしか進まない。識名にあった野戦病院壕跡を探す。ここでは首里撤退時に多くの重症患者が殺処分された。近藤氏が案内して下さる予定であったが、識名に到着した時点ですっかり疲れておられ、道や方角が分からなくなっておられた。近藤氏には那覇のホテルに戻って頂き、別のタクシーを呼ぶ。地元住民に尋ねながらしばらく探すが見つからず15:00頃に断念。再度南部を目指す。

東風平

島尻郡東風平の三叉路は南部島尻へ下る際に必ず通る地点で、首里放棄後の南部撤退時（5月29日前後）には東西の海岸から艦砲射撃が浴びせられ、日本軍だけでなく、多くの避難民が犠牲になった（写真18。右に行けば米須、左に行けば具志頭方面）。その惨状は多くの沖縄戦の回顧録に触れられており、強い印象を残す。大西氏の回顧録から一部を引用する。



写真18 東風平の三叉路

“東風平”の部落に近くなった。道路には屍体、擱かくぎ坐された戦車、十五榴15センチ榴弾砲の破壊されたもの、自動車の残骸等、或は重症患者が道路に横たわって苦しそうな声で「殺せ………」と叫ぶ。これ等の兵隊は私達と同様服はやぶれ泥んこになり、髪や髭はぼう々と伸び、ほはこけて見るからに哀れな姿の者ばかりであった。片足、片手、失明、両足のないダルマの様な患者が死の直前の苦しいあえぎの中にも、尚も生き抜く努力を続けていた。精魂を使い果たし、文字通り刀折れ矢弾つきた将兵たちは悲劇の墓場へと集結していく。そのいたましき姿、“俺を殺せ”“手榴弾をよこせ”としきりに叫んでは居たが、彼等を殺すことも出来ず、又手榴弾をやるにもそれはなく、私達はこの彼等の要求に何一つ応ずることなく歩きつづけた。

沖縄住民の死体も数へ切れないうちあり、最も悲惨なものは一家族全部戦死の場面であった。弾を受けてから残り時間がたって居ないらしく、その中の一人の子供はウーンと最後の苦悶を続けて居た。両親及他の二人の子供は完全に死んで居り、矢張りどこかへ避難する途中であったのだらう、鍋釜世帯道

具を夫々背負った俣斃れて居た¹⁹。

ここでは線香をあげ、犠牲者の冥福を祈った。

豊盛のシーサー

豊盛集落の中の高台の上にある。集落の守護神であり、この高台は集落の伝統行事が行われる場所であったようだ。シーサーの身体には弾痕が残る。沖縄戦で周囲がすっかり焼け野原になる中でぼつんと残ったこの大きなシーサーと記念撮影する米兵の写真が沖縄戦の記憶としてよく知られているという。

米須集落

南部撤退後の第十四大隊守備陣地である米須西側台地と82高地（小渡おど）を探す。圭川の終焉の地に近くなる。案内をしてきていたタクシー運転手国吉さんの発案でコミュニティセンターに入ると、ちょうど地元の老人たちが3、4人居合わせ、国吉さんが老人たちと沖縄言葉でやり取りをしてくれた。筆者には殆ど聞き取れなかったが、米須集落近くにあった日本軍陣地と、小渡にあった日本軍陣地（82高地と想定）への行き方や見やすいポイントなどを詳しく教えてもらうことが出来た。

米須西側陣地

やはり樹木の生い茂る丘であるが、米須集落との位置関係や高度からこの一帯であることはほぼ間違いないだろうと思われる（写真19）。陣地跡を探す手がかりはなかったが、泉に降りていくらしい石段の脇から茂みに向かって分け入りやすい筋のような空隙を見つけ、それでも草を掻き分けつつ斜面を登っていくと、自然壕が口を開けていた（写真20）。数人が身を潜めることが出来るかどうかという狭さである。恐らくこの丘には至る所にこのような壕があると思われる。

第十四大隊は6月5日夕に目取真から米須に向けて出発しているから、途中順調に進めなかったとしても6日～7日には到着しているだろう。この時期、十四大隊は隊長以下520名。約十日後の17日には82高地と摩文仁に転進しているから、陣地構築いんちまの暇は無く、一帯のこのような自然壕に拠って戦闘態勢をとっていたものと思われる。

82高地

十四大隊の最後の戦闘地、玉砕の地である。米須集落と摩文仁の間にある小渡地区おどの標高82



写真19 米須西側陣地を探して



写真20 自然壕の入り口

の高地というのが手がかりであるが、ここも探しあぐねる。まず地図には大渡はあっても小渡がない。前述のコミュニティセンターでのやり取りで、「小渡」は戦後に縁起をかついで「大渡」と改められたことが分かった。その小渡にあった日本軍陣地ということで、82高地であろうと想定した地に向かう。老人たちの記憶ではその丘には当時高射砲が据えられていたという。教えられた通りに行くと、小高い丘の上に今はレストランがある。そこから西に臨むと、右手に真壁集落、正面に米須集落、その奥に先ほどの西側陣地、手前に小渡集落が見える。すぐ手前の茂みの下へと続く側面に陣地があったという。同じ地点で左に目をやると海岸である。そのまま東に向かって摩文仁の丘へと続く。ここが82高地と想定し、西に米須集落を望む側で、持って来た水や線香を墓標に見立てた椰子の木に備えて吊う。高台を降りて、西側斜面の状況を写そうと、タクシーで撮影地点を物色して、狭い路地を歩きつ戻りつつうろろする。何地点かで撮ったが建造物に遮られて、地勢は分りにくい。

「沖縄戦ニ於ケル独立歩兵第十四大隊史実資料²⁰」によると、十四大隊は6月17日には「旅団命令ニ依り、一部ヲ以テ真文仁ニ、主力ヲ以テ八二高地ニ転進」している。圭川が中隊長を務めていたはずの機関銃中隊は大隊本部、剣持中隊、歩兵砲中隊と共に82高地を拠点とした。そして、田宮中隊は他の中隊と共に「二十日夕刻迄殆ント戦死シタルヲ以テ同夜全員最後ノ斬込ヲ決行ス」（上記資料の「付図其ノ五 米須及八二高地付近ノ戦闘経過要図 自六月六日 至六月二十日」とある。上記資料本文の記述もほぼ同じであるが、「(20日夕刻には) 大隊モ亦各隊四離滅裂トナリ、残存者僅カトナレリ。同夜半大隊ハ師団命令ニ依リ残存者ヲ以テ2, 3名ノ組ヲ編成逐次全員敵陣ニ斬込ヲ決行ス」とある。

十四大隊の主力はほぼこの地で“組織的戦闘”を終了、20日には玉砕したことになる。三重県庁の記録では圭川は6月26日に「米須方面に於いて戦死」とある。「各隊四離滅裂」となった後の記録は何を根拠としているのか不明であるが、これが正確であれば、20日の斬込の後も生存し、沖縄戦全体の“組織的戦闘”終了3日後に戦死したことになる。既に戦闘は行われていないはずであるから、元部下の方が推測した「摩文仁の丘、現三重の塔裏手で手榴弾にて自決」も信憑性があるかもしれない。いずれにせよ、米須-82高地-摩文仁の丘は徒歩でも半時間と掛からない位に近接していることから、20日から26日の間、この一帯で最後を迎えたというこの範囲には収まるのだろう。

まぶに 摩文仁・平和祈念公園

今度は平和の碑に刻まれた圭川の名を探す。まず資料館で出身地と氏名から検索。刻銘地点を示す地図を印刷して歩き出す。地元の人々は夕方になってから“墓参”に来る人も多いらしく、まだ明るいものの日差しは和らいだ平和の碑の沖縄出身



写真21 平和の碑

者のエリアは大変賑やかである。一方、他府県出身者のエリアは閑散として寂しい。圭川の刻銘を見つけ、水を掛け線香を供えて、手を合わせた(写真21)。

三. 体験者に聞く

三日め6月24日は近藤氏の訪問にお供する形で沖縄戦体験者を訪ねた。

元女子看護隊（梯悟学徒隊）

石部隊の看護に当たったのは、主に梯悟学徒隊と瑞泉学徒隊の女学生達だった。近藤氏は戦後その生存者の方たちとの交流を続けておられる。今回はその訪問に同行する形で、当時私立昭和高等女学校の生徒で梯悟学徒隊として活動した稲福マサ様宅を訪問する(写真22)。瑞泉学徒隊は今も慰霊祭を続けているが、梯悟学徒隊は戦後60年を期に生存者の減少と高齢化が原因で慰霊祭に区切りをつけた。このため、近藤氏は梯悟学徒隊の方は個別に訪問された。

話は双方および他の生存者の近況や体調、敗戦末期の状況などに及ぶ。筆者の同席により、十四大隊玉砕の地、米須および摩文仁での6月20日前後の話を聞いた。女学生が恐怖の中で垣間見た風景は前後の脈絡や位置関係が判然としなかったが、傷ついた女学生たちの様子など、その場の雰囲気は感じられた。

最後は摩文仁の丘で捕虜となった。摩文仁の丘の上に司令部があるとも知らず（筆者注：近藤さんも捕虜になってから知った）、丘のふもとの排水溝の中で隠れていた。21日朝まで摩文仁の丘は緑が一杯だったが、朝8時頃から攻撃が始まり、11時頃に排水溝から覗いて見た時にはすっかり焼けていた。

稲福様宅を辞し、近藤氏はホテルに戻る。筆者は稲福さんからタクシー運転手に識名の野戦病院壕跡までの行き方を説明してもらい、タクシーで向かう。

識名の野戦病院壕跡

まず、光明寺石段を上へ上がって、高台に上がる。光明寺裏手、玉城さん宅の1, 2軒左隣に地下に降りる口が開いている(写真23)。学生達がしばしば社会見学に来るそうだ。狭い階段を下りて行くと、右手に屈まないと入れないような天井の低い口が開いている。慰霊のためか、小さな祭壇様のものが据えてある。足元は水気も殆ど無く、崩れたりもしないので、他の小さな壕より入り



写真22 元梯悟学徒隊、稲福マサさん



写真23 識名野戦病院壕入り口

やすい。屈みながら入って行き、少し目が慣れてくると、4畳ほどの空間であるのが分る（写真24）。大西氏の手記にある通りの鍾乳洞である。照明を持参しなかったため、その先が見えず、壁かと思うがカメラで撮影してみると、左右とも奥に通路らしきものが延びているようだ。天井や壁の状態は安定している感じで崩落の危険は感じなかったが、一人であったため、それ以上奥に進むことは断念した。



写真24 野戦病院壕内部

住民との対話：サイパン玉砕からの生還

外へ出て、入口を教えてくれた玉城さんにお礼を言うと、しばらく立ち話になった（写真25）。



写真25 体験談を聞く（識名野戦病院壕跡付近）

あの入口からは見えているだけしかない。本来の野戦病院はこの北側の下が絶壁状になった地点（確認した入口から50メートルほど北）の地下にあったと聞いている。

自分は30年ほど前にこの地に移り住んだ。その頃はまだ一帯には何もなかった。壕からは遺骨が沢山出たと聞いている。摩文仁の当りは骨ばかりで白かったと。石ころみたいに一面にあるからどけないと歩けない。避けきれずに、歩くと骨を踏み潰してしまうほど。戦争は怖いよ。絶対にだめ。集団自決のことは、住民が言うのが本当のこと。あの頃は軍に反対するようなこと言ったら、スパイ扱いで殺された。スパイ容疑で殺された住民は沢山いる。

本来は具志頭が郷里。戦時中、志願して軍属となり、サイパン島に行った。お国のため、天皇陛下のためと教育を受けていたから。サイパンのような小さな島で1ヶ月も持ちこたえた。食べ物も飲み水もなく、ひと月の間に食事をしたのは3回ほどで下水を飲んだ。捕虜になってハワイに連れて行かれた。収容所は良かった。食事もあるし、煙草も酒もあった。作業をすれば報酬もあった。戦時中よりずっと良かった。日本軍の徴用では二月働いて一月分の給金だった。

むすびに

壕がある茂みの中に分け入っていくと、むっとする草いきれや温室の中のような高温多湿の空気に耐えながら、急な斜面を上り下りし、樹木や草で手足を擦りむいたり引っかいたり、蜘蛛の巣に引っかかり、蚊に刺され、果てはハブに怯えながら、脆く歩きにくい珊瑚礁の地面と格闘するこ

とになる。慣れない環境に、短時間でもひどく消耗する。現場に身を置いて始めて、空調の効いた室内で資料や地図を見ているだけでは到底想像できない現場の状況をわずかながらも実感できた。あの中を重い武器を持って転げ回り、壕の中で寝起きし、飲まず食わずで戦闘をすることを思うとぞっとするばかりであった。

華北では多くの人の人生や生命を踏みにじる存在であった日本軍であるが、沖縄戦の戦場跡で見ると日本軍も哀れである。貧弱な装備で戦う日本軍や日本兵について感情移入してしまう。では、圧倒的な破壊力を持つ米軍への敵愾心が生まれるのかということ、時折それらしき感情が頭をもたげなくもないが、訳も分からない外国の島に連れて来られて、こんな茂みの中で戦うのはどんなにか恐ろしく辛いことだったろうと、事前には予想もしなかった思いが湧いた。地図や数値をどんなに眺めても生じることがない視点である。今回の訪問は急な展開で同行を決定したため、事前準備が十分でなく、貴重な機会を生かしきれないが、主に文献に頼って研究を行う筆者にとって、たとえ僅かな時間でも現場に身を置くことで見えてくるものがあることを教えてくれた調査であった。

資料出典：

- 図1 内海愛子・石田米子・加藤修弘編『ある日本兵の二つの戦場 近藤一の終わらない戦争』社会評論社、二〇〇五年、206頁
 図2 内海・石田・加藤、前掲書、214頁
 図3 内海・石田・加藤、前掲書、233頁

- 1 大西昇『沖縄戦記 石部隊の部』昭和53年。
- 2 近藤一氏にもこの頃「爪と髪を切って封筒に入れさせられた」という証言がある。内海愛子・石田米子・加藤修弘編『ある日本兵の二つの戦場 近藤一の終わらない戦争』社会評論社、二〇〇五年、92頁
- 3 以上の経路はどの史料でも一致するが、期日は1日程度前後する。
- 4 夥しい戦死者や撤退で見捨てた傷病兵への思いと共に、首里死守の主張は第六十二師団生存者には強い印象を残している。
- 5 第32軍残務整理部「沖縄作戦ニ於ケル独立歩兵第14大隊史実資料」（昭和22年3月25日付）中の「付図其ノ五 米須及八二高地付近ノ戦闘経過要図 自六月六日 至六月二十日」中の手書きの説明文（第32軍残務整理部・防衛研究所戦史部編『第六十二師団史実資料（二）昭和20.12.22～20.6.20』所収）
- 6 「僅少」の可能性も。不鮮明。
- 7 前掲注5資料「六 戦闘経過ノ概要其ノ六 米須附近及八二高地戦闘」
- 8 三重県健康福祉部長名による「軍歴証明」（平成18年8月24日発行）。

- 9 1994年に聞いたもので、その時点で存命な方の中ではという意味の可能性もある。
- 10 手書きの筆跡が不鮮明。藤岡の可能性もある。
- 11 山本氏は松浦氏と共に50回忌法要の世話人として動いておられた。
- 12 内海・石田・加藤、前掲書。
- 13 元独立歩兵第二十三大隊兵長、勝又氏の回顧。内海・石田・加藤前掲書、109～110頁所載。
- 14 しかし、大西氏の手記によると、陣地は西に2, 3キロほど離れた丘陵地帯に中隊単位で点在していて、それぞれの陣地近くの民家に民宿したようである（大西、前掲書、18頁）。
- 15 大西、前掲書、39～42頁参照。
- 16 「沖縄戦史」<http://www.okinawa-senshi.com/142koutinisikarakann.JPG>
- 17 1994年当時沖縄から戻ってすぐにまとめたアルバムにはこのように手書きしてある。「三重の塔の裏手の木が生い茂った丘にある。上は木が茂り、ツタがからまる上に、足元はサンゴ質のもろく砕け易い岩で非常に歩きづらい。ひっくり返ったり、足をひっかいたり苦勞する」。
- 18 原文は手偏であるが、内容に鑑み、木偏に改める。
- 19 大西昇『沖縄戦記 石部隊の部』昭和五三年、80頁。引用では読みやすいように句読点を加えている。
- 20 前掲注5資料。